

蔵書探訪

和歌×連歌



第99回明治大学中央図書館ギャラリー展示

明治大学図書館所蔵

萩藩毛利家の歌書

—毛利重就とその時代—

会期 2026年9月26日(土)～10月8日(木)

休館 9月30日(水)

場所 明治大学中央図書館1Fギャラリー (入場無料)

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 TEL 03-3296-4250

図書館の開館中は観覧いただけます。開館情報は図書館ホームページでご確認ください

URL <https://www.meiji.ac.jp/library/>

明大図書館

検索

ご挨拶

このたびは、「明治大学図書館所蔵萩藩毛利家の歌書——毛利重就とその時代」展にご来場いただきまして、まことにありがとうございます。

明治大学図書館には毛利家旧蔵資料のコレクションが収蔵されています。明治大学文学部教授^{よすけ}渡邊世祐教授(萩藩出身)の縁で、毛利家の歌書や連歌書の多くが明治大学に寄贈されました。また、明治大学博物館には古文書が収蔵されており、図書館と博物館の収蔵資料をあわせて「明治大学所蔵毛利家文庫」と呼称しております。このほか、萩藩毛利家の所有していた書物や絵画などは、毛利博物館、山口県文書館などにも所蔵されています。

今回の展示は、近世期における萩藩毛利家の蔵書形成過程に影響を与えたとみられる毛利重就^{しげたか}とその時代における萩藩の蔵書探訪をテーマとしています。2023年にも毛利家文庫の歌書を^{ひろもと}中心とした「毛利家の文芸」展を開催し、毛利弘元(元就の父)が安芸国住人であった頃のいわば毛利家創生の時代から明治維新に至る300年の文化活動をご紹介します。本展示は明治大学図書館所蔵毛利家文庫に所蔵されている書物を扱う第2段として企画しました。2026年10月3日(土)の和歌文学会大会のシンポジウムで扱う資料も何点か展示されております。

毛利重就(1725～1789)は、毛利匡広の五男として生まれ、享保20年(1735)に第8代長府藩主となります。しかし、宝暦元年(1751)に萩藩主毛利宗広が死去し、第7代藩主として家督を継ぎました。重就は宝暦検地を実施し、撫育方を創設して新田や塩田の開発をするなど藩政に尽力し、その功績により中興の名君として評価されています。また、重就は和歌の造詣が深く、特に冷泉為村との関係は既に先学によって指摘されているところではありますが、2025年に明治大学図書館で自筆本が新たに発見されました。重就は明和3年(1766)頃から和歌に熱心に取り組むようになり、茶道にも勤しむなど、毛利家の文芸や文化を支えた重要な人物^{はるちか}です。その後、天明2年(1782)に隠居して息男治親に家督を譲り、寛政元年(1789)に65歳で世を去ります。

本展示は第一部「毛利重就の自筆資料」、第二部「重就交遊録」、第三部「安永五年頃の蔵書——『宝庫御書物目録』より——」、第四部「毛利家と連歌」、第五部「毛利重就の時代と蒐書」によって構成されています。

なお、本展示は文部科学省科学研究補助金・基盤研究(B)「中近世毛利家における知的体系の復原的研究—明治大学図書館所蔵毛利家旧蔵書を起点に」(研究代表者・牧野淳司・課題番号23H00605)の成果によることを附言いたします。

近世期における萩藩毛利家の豊穡な世界を、お楽しみいただけましたら幸いです。

商学部専任准教授 中村 成里

展示について

本展示は【第1部】～【第5部】までの各ブースに分かれています。観覧していただく際に、このリーフレットをお読みいただけますと幸いです。

【毛利重就について】（1725～1789）

萩藩第7代藩主。毛利匡広五男として誕生、その後享保20年（1735）に第8代長府藩主となります。その後、宝暦元年（1751）に萩藩主毛利宗広が死去した後に家督を継ぎました。宝暦検地の実施、撫育方の創設をはじめ新田や塩田の開発など藩政に尽力し、その功績により中興の名君と称されています。また、重就は特に和歌の修養に熱心で、明和3年（1766）頃から冷泉為村と親交を深めていきます。このほか、茶道にも勤しみ、寛政元年（1789）に逝去するまで毛利家の文芸や文化を支えました。

【第1部】毛利重就の自筆資料

2025年の調査で、重就の自筆本が複数発見されました。これらはすべて、天保10年（1839）頃の萩藩の蔵書目録である『御書物目録 大納戸』（山口県文書館蔵毛利家文庫54目次・47）に重就自筆として掲載されています。重就の自筆資料は山口県防府市の毛利博物館所蔵に収蔵されていますが、明治大学図書館で発見された書物は本展示で初めて公開される運びとなりました。

ていかよう

明治大学図書館所蔵の重就自筆資料は、現時点で確認されているものはいずれも定家様（定家流とも）と呼ばれる藤原定家の書風を模した書体で記されているのが特徴です。毛利重就は、冷泉家中興の祖と称される冷泉為村（1712～1774）に、明和3年（1766）の頃から和歌を教わっていました。「6、為綱卿為久卿為村卿百首之和歌」は、冷泉為綱、為久、為村への関心を

のぶつら

示す書物ですが、娘婿の出羽上山藩主松平信亨のもとにあった書を重就が安永7（1778）年に書写したものです。「9、百首和歌 2巻」は藤原家隆の『玉吟集』のうち、「初度百首」「後度百首」を書写しています。他は後桜町天皇、後桃園天皇、光格天皇の時代の歌会資料です。表紙の統一性がないことから、随時資料が持ち込まれ、都度重就が書写したと推察されます。

【第2部】重就交遊録

毛利重就は明和7年（1770）に毛利元就の二百回忌、安永3年（1774）に毛利輝元の百五十回忌の法要を大々的に行います。「10、元就公御法會御寄附詩歌扣 2巻」と「11、輝元公百五十回御忌御追慕和歌」は、法要の際に詠まれた和歌と詩歌を集成したものです。

「12、重就公御年賀之和歌控 2巻」は重就の61歳の誕生を祝う和歌と詩歌がおさめられています。これらの資料からは、重就の構築してきた人脈が見て取れます。たとえば、元就追慕和歌の勧進は冷泉為村により、娘婿の鷹司輔平（1739～1813）をはじめとする公卿が和歌を

寄せています。元就の法要では、家中の藩士たちも和歌や詩歌を詠んでいます。加えて女性たちも和歌を詠んでいたことが注目されます。

重就の交遊は茶人の川上不白、宝生流能楽師の宝生英蕃、徳見宗淳などにも及び、宝生流の謡本(「14、寶生流下掛謡本」)や謡本が所蔵されていたことから、能楽師を出入りさせていたことが伺えます。そして、「13、中院家聞書」は、安永5年(1776)に若き日の松平定信の所持していた本を書写したものです。また、美しい近代の謡本には、書写する際に用いた罫線の紙が挟まれており、どのように書写されていたのかがわかる面白い資料です。

【第3部】安永五年頃の蔵書——『宝庫御書物目録』より

安永5年(1776)頃の萩藩の蔵書目録が『宝庫御書物目録』(山口県文書館蔵毛利家文庫54目次・67)で、当時の貴重資料の目録であったとみられます。このブースでは、この目録に掲載されている資料のうち、明治大学図書館所蔵にかかるものを一部展示しました。

「19、老葉」は飯尾宗祇(そうぎ)の第二連歌集で、小早川詮平(のち正平、1523～1543)の花押がみられます。詮平の娘は元就の三男である小早川隆景の室となりました。小早川家に関係する書が毛利家に流入していたといえます。

また、「20、三部抄」「21、三部抄注」「22、出葉(てには)口傳抄」は、歌道の伝授に関わる書です。上記のうち、「21、三部抄注」の奥書は毛利元康(1560～1601、元就の八男)によるもので、朱書きの箇所は連歌師の里村玄仍(1571～1607、紹巴の長男)が書き入れたもので、「23、勅撰名所拔書」と共通する「直治」という印記が捺されています。両者は共通の伝来を持つことがわかりますが、この「直治」が誰であるかは未解明です。「24、拾遺愚草、4巻」の下巻は、毛利元就の父である弘元の自筆本で、員外はIV類本です。

萩藩の宝庫には、毛利家伝来の書に加えて小早川家や^{あさ}厚狭毛利家の祖とされる毛利元康に関わる書も収蔵されていたのです。

【第4部】毛利家と連歌

連歌は、和歌の31文字を二人で「5・7・5」と「7・7」を詠みあう短連歌と、複数人が「5・7・5」と「7・7」を詠み続けていく長連歌の形態が知られています。中近世は主に後者の形態で詠まれており、本展示のものも後者に属します。このブースに展示されている書物は、いずれも上記の『宝庫御書物目録』に掲載されており、安永5年(1776)時点において貴重資料として認識されていたものです。

毛利家旧蔵の連歌資料には、連歌師^{じょうは}紹巴(1525?～1602)の影響がみられます。紹巴は三好長慶、織田信長、明智光秀、豊臣秀吉などの戦国武将や公家、高僧などとも関わりがありました。「28、紹巴発句帳」は紹巴の連歌の発句の集成であり、現在も『連歌大観』の底本として用いられています。「29、賦薄何連歌：天正十六年菊月」は『宝庫御書物目録』には「紹巴発句之懷紙」と記されていますが、内容はこれと同一であり、天正16年(1588)9月に催行された紹巴、正允、昌叱、文閑ほか十名による長連歌です。「31、至寶抄」も紹巴関連の書です。

「30、和歌條々」は、飛鳥井家に継承された和歌の伝授書です。連歌コーナーからは少し外れますが、紹巴と同時代の貴重書です。大内氏の家臣であった弘中興勝^{おきかつ}が、永正6年(1509)閏8月に飛鳥井雅俊(1462～1523)から伝授されています。大内氏は毛利家と覇権を争った大名でしたが、当該書はその文物が毛利家に吸収されていたことの証左となります。

牡丹花^{しょうはく}肖^{しょう}柏^{はく}(1443～1527)関連の書として「肖柏口傳之拔書」、天文24年4月10日に催行されたとされる「32、賦何路連歌：三好長慶連歌」、飯尾宗祇^{そうぎ}(1421～1502)の門人である宗長^{そうせき}(1448～1532)と宗碩(1474～1533)が両吟した「33、伊勢千句」もあり、毛利家が室町期の連歌資料を所持していたことが見て取れます。

【第5部】毛利重就の時代と蔵書

先述のとおり『宝庫御書物目録』は、安永5年(1776)頃に編纂され、この時期に宝庫の整理が為されたとみてよいでしょう。重就存命の時期の蔵書には、題簽^{だいせん}に特徴があります。それは金泥で龍紋と呼ばれる文様(『題集』がよい例です)が捺されているものが散見されることです。このブースに展示されている書物には、いずれもこの文様が題簽に見られます。つまり、これらの書物は重就の時代に現在の仕様に整えられたと考えられます。

「35、三光院殿聞書」の「三光院」とは三条西実枝^{さねき}(実澄とも。公条の息男)の法名であり、当該書は実枝の言辞を書きとどめた歌道の聞書です。伝本は略本系(B系統)となります(大谷俊太氏・豊田恵子氏「校本『三条大納言殿聞書』付略解題」『叙説』31号、2003年)。「36、素然名所百首」の「素然」とは中院通勝の法名です。通勝は後陽成天皇の勅勘を受けたものの、歌人として高い評価を受けていました。安永5年(1776)、重就は松平定信から借りて書写していたことが奥書から伺えます。「37、詠歌拔出」は、中院通村、通茂の和歌を選び、集成したものです。秀歌撰のような書と言えましょう。「40、溪雲院前内府詠百首和歌」は中院通茂の和歌を収載した書で、霊元天皇の勅点が付されています。

「38、和歌四式」は歌学書で、『歌経標式』『喜撰式』『孫姫式』『石見女式』の四書が収められています。『歌経標式』『喜撰式』『孫姫式』は平安中期以降に成立し、『石見女式』は鎌倉後期頃に成立しています。「39、玄玄集」は能因による私撰集です。当該本は167首が収められている二類本とされています(『新編国歌大観』解題・久保木哲夫氏・平野由紀子氏執筆)。

若き日の松平定信との歌書を介した交流や、三条西家の歌学、中院家の和歌、平安期の歌集や歌学書など、重就の時代に整理された歌書は多岐にわたります。現在の毛利家旧蔵資料の画期は、重就の時代にあったといえるのです。

(中村 成里)

重就の自筆資料

題簽



一丁目表



ここでは、重就の自筆資料の一部について説明します。左の資料は、「7、題集」の題簽と、一丁目表です。天保十年（一八三九）頃に編纂されたとみられる『御書物目録 大御納戸』（山口県立文書館蔵・毛利家文庫54・目次47）に重就自筆の書物として記されています。両者を比較すると、やはり両方とも同筆であり、かつ定家様で記されていることがわかります。また、題簽に金泥で龍紋の文様が捺されていることにも注意されます。龍紋の捺された題簽は、毛利家文庫所蔵の他の書物にも見られます。これらは重就の時代に整理された書物と考えられるのです。

（中村 成里）

毛利家本の表紙と 題簽の筆跡

明治大学図書館の毛利家旧蔵本（以下「毛利家本」と略称）の中で「貴重書」とされる古典籍を網羅的に調査したところ、黒・または濃紺無文の紙表紙を付し、同じ筆跡で外題（書名）を記したものが多く見出されました。一例を示しますと

（出葉口伝抄 091. 4/42）



（兼載連歌伝書 091. 4/51）

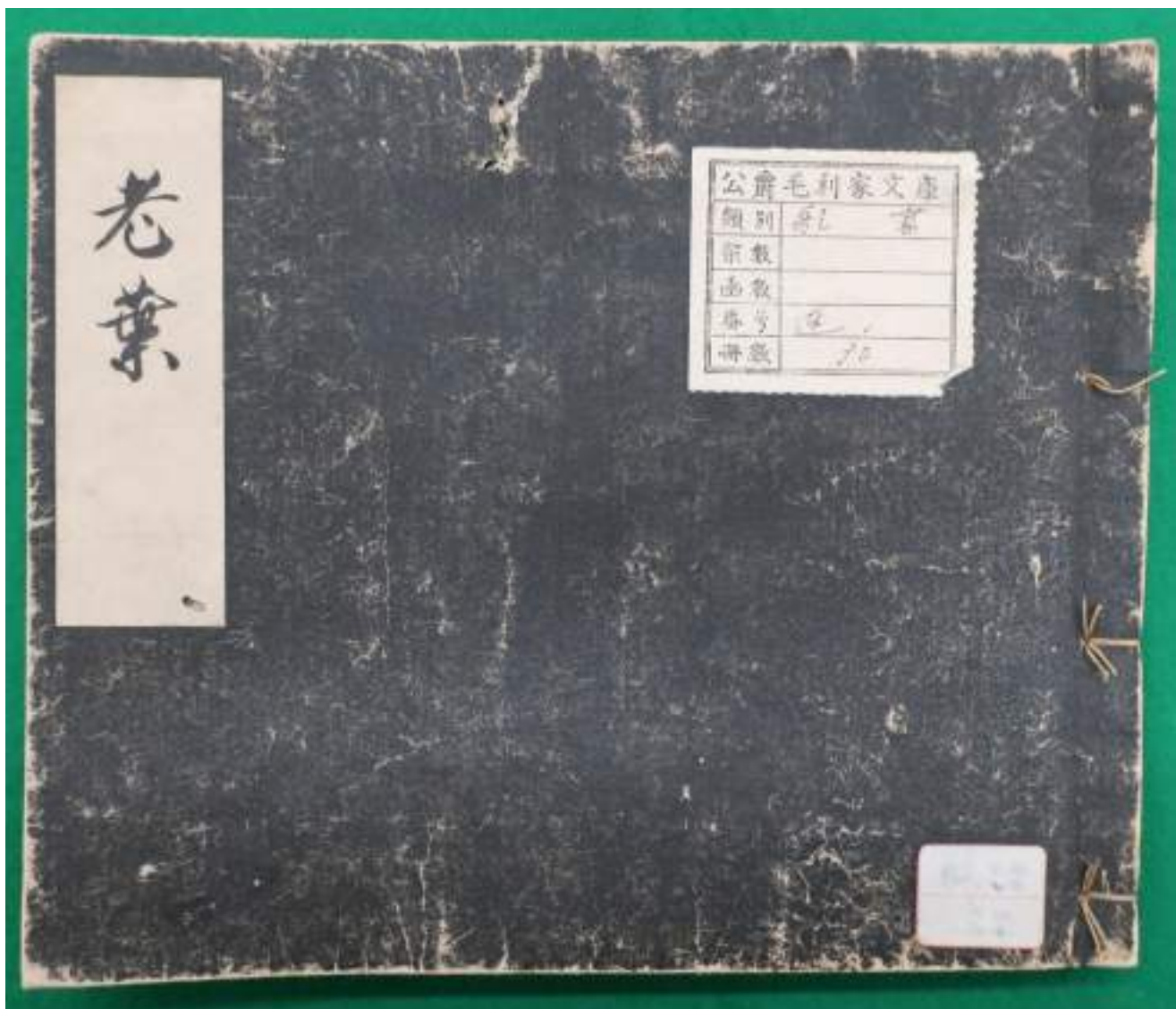


「伝」（傳）の字を比べてみて頂くと、よくわかると思います。同様の典籍は、現時点で判明したところによると、歌書・連歌を中心とした「貴重書」の中に 40 点ほどが確認されました。これらの典籍群は、江戸初期（1596～1644）以前に書写されたものであることが、調査から分かっております。

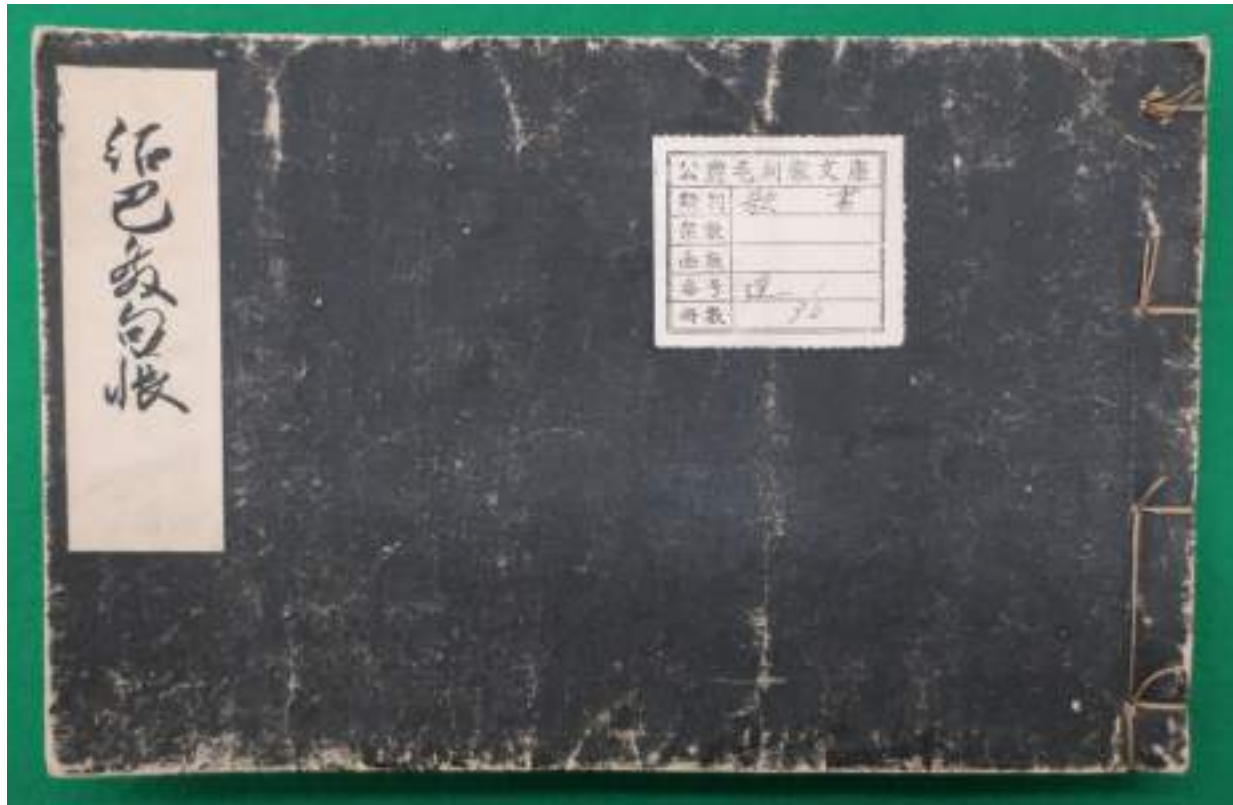
○ 詞花和歌集（091. 4/12//H）○ 百人一首註（091. 4/13//H）○ 百人一首註（091. 4/14//H）○ 三部抄（091. 4/15//H）○ 三部抄註（091. 4/16//H）○ 拾遺愚草（091. 4/18//H）* 古裂表紙 ○ 名寄（091. 4/20//H）○ 勅撰名所拔書（091. 4/21//H）○ 古歌拔書（091. 4/22//H）○ 飛鳥井雅親卿歌書（091. 4/23//H）○ 西園寺家鷹百首（091. 4/24//H）○ 西明寺殿百首（091. 4/25//H）○ はにふの物がたり（091. 4/26//H）○ 下紐（091. 4/27//H）○ 連歌新式拔書（091. 4/30//H）○ 老葉（091. 4/31//H）○ 連歌秘伝集（091. 4/32//H）○ 兼載連歌書（091. 4/33//H）○

至宝抄 (091.4/35//H) ○紹巴発句帳 (091.4/36//H) ○於伊勢太神宮法楽御千句両吟:大永二年八月四日 (伊勢千句 091.4/37//H) ○賦何船連歌: 慶長十八年十二月十八日 (月次御連歌 091.4/39//H) ○賦何人連歌:慶長十八年霜月十八日 (月次御連歌 091.4/40//H) ○出葉口伝抄 (091.4/42//H) ○万句発句 (091.4/43//H) ○賦薄何連歌: 天正十六年菊月 (紹巴発句之懷紙 091.4/44//H) ○賦何路連歌: 大永三年九月二十一日 (宗硯発句之懷紙 091.4/45//H) ○賦何路連歌: 三好長慶連歌 (091.4/46//H) ○連歌之切 (091.4/47//H) ○賦朝何連歌:天文九年四月二十五日 (梅宗牧両吟連歌 091.4/48//H) ○詠百首誹諧 (誹諧百首 091.4/50//H) ○兼載連歌傳書 (091.4/51//H) ○源氏物あらそひ (091.4/52//H) ○賦何木連歌: 慶長八年十一月十五日 (玄仍発句之連歌 091.4/53//H) ○玄仲点取連歌 (091.4/54//H) ○肖柏口傳之拔書 (091.4/55//H) ○初何:永禄十二年八月七日 (紹巴・藤孝・昌叱三吟連歌 091.4/56//H) ○連歌新式拔書 (091.4/57//H) ○新歌仙 (091.4/68//H) ○六家集 (091.4/69//H)

(老葉 091.4/31)



(紹巴発句帳 091.4/36)



(三好長慶連歌 091.4/46)



この濃紺色または黒色の表紙が付された冊子本（袋綴装）には、江戸時代中期以前にしばしば見られる「押八双」（表紙左端に押し界（白界）で示された線）を持つものが一点も見出されません。そしてこれら「貴重書」は、安永（1771～1782）頃に成立した『宝庫御書物目録』（山口県文書館蔵）の中に「一、歌書、連歌書」として記載されているところの書目とほぼ一致します（樹下文隆「毛利家・萩藩旧蔵典籍目録稿（1）」『広島女子大学国際文化学部紀要』11, 2003・3）に翻字・報告）。つまり毛利家本の「貴重書」は、江戸時代の中期頃に整理され、その時に装訂を現在見られる形に改められたものと考えられるのです（展示番号19～34）。

安永頃の萩藩・毛利家の当主が、毛利重就（しげなり／しげたか、1725～1789）です。「毛利家中興の祖」ともされる重就は和歌を良くし、伝来の蔵書を整理しつつ、新たに典籍を書写・蒐集し、自らも多くの典籍を書写しています。それらは、明治大学図書館蔵毛利家本の中に多数、現存しています。今後、さらなる調査により、その全容が解明されていくことが期待されます。

（石澤一志）

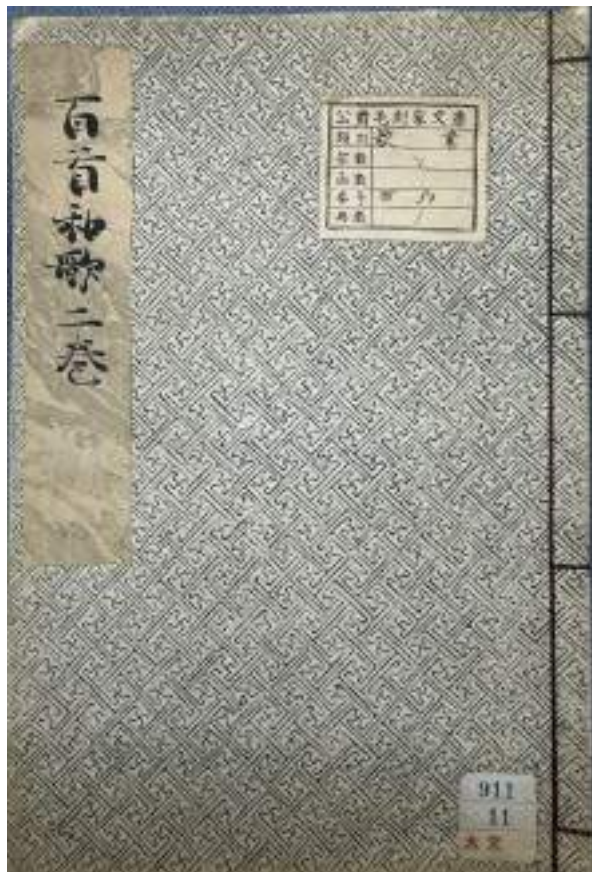
《展示のみどころ点描 ——重就の時代の書》

左は【第一部】に展示されている「9、百首和歌 二巻」（題簽と本文が重就筆）、右は「5、仙洞御会和歌〈二巻〉」（題簽のみ重就筆）です。題簽は生成色の紙に薄墨の墨流しで染色が施され、表紙は紗綾形^{さやがた}の文様の仕様となっています。この二冊は同時期に現在の体裁に整えられたのでしょう。これに共通する題簽と表紙は他にも散見され、重就の時代における書の特徴づける体裁といえます。

（中村 成里）

百首和歌 二巻 (911/11//D)

仙洞御會和歌〈二巻〉(911/42//D)



展示目録

テーマ		書名	資料番号	冊数
毛利重就の自筆資料	1	仙洞月次御会和歌〈明和九年従／正月至七月〉	911/33//D	1冊
	2	御所御当座始和歌写〈明和／三年〉	911/34//D	1冊
	3	御所御會和歌寫 明和七年/正月ヨリ六月マテ	911/35//D	1冊
	4	御所御會和歌寫 安永六年従正月七月マテ	911/35//D	1冊
	5	仙洞御会和歌〈二巻〉	911/42//D	1冊
	6	為綱卿為久卿為村卿百首之和歌	911.157/23//H	1冊
	7	題集	911.107/11//H	1冊
	8	禁裏御会始 其外御会御會 御詠写	911/27//D	1冊
	9	百首和歌 二巻	911/11//D	1冊
重就交遊録	10	元就公御法會御寄附詩歌扣 2巻	919.5/86//H	2冊
	11	輝元公百五十回御忌御追慕和歌	289.1/424//H	1冊
	12	重就公御年賀之和歌控, 2巻	911.157/20//H	2冊
	13	中院家聞書	911.104/25//H	1冊
	14	實生流下掛謡本	091.1/5//H	20冊
	15	謡本	912.3/59//H	6冊
	16	謡本	768.3/12//H	1冊
	17	謡本: 28番	912/8//D	6冊
	18	謡曲百五十番	099.2/9//D	8冊
安永五年頃の蔵書『宝庫御書物目録』より	19	老葉	091.4/31//H	1冊
	20	三部抄	091.4/15//H	1冊
	21	三部抄注	091.4/16//H	1冊
	22	出葉口傳抄	091.4/41//H	1軸
	23	勅撰名所拔書	091.4/21//H	1冊
	24	拾遺愚草, 4巻	091.4/18//H	4冊
	25	名寄	091.4/20//H	1冊
	26	西明寺殿百首	091.4/25//H	1冊
	27	源氏物あらそひ	091.4/52//H	1冊
毛利家と連歌	28	紹巴發句帳	091.4/36//H	1冊
	29	賦薄何連歌: 天正十六年菊月	091.4/44//H	1軸
	30	和歌條々	091.4/48//H	1軸
	31	至寶抄	091.4/34//H	1冊
	32	肖柏口傳之拔書	091.4/55//H	1軸
	33	賦何路連歌: 三好長慶連歌	091.4/46//H	1軸
	34	伊勢千句	091.4/37//H	1冊
毛利重就の時代と蔵書	35	三光院殿聞書	911.104/22//H	1冊
	36	素然名所百首	911.149/14//H	1冊
	37	詠歌拔出	911/30//D	1冊
	38	和歌四式	911/8//D	1冊
	39	玄玄集	911/139//D	1冊
	40	溪雲院前内府詠百首和歌	911/94//D	1冊



明治大学図書館
MEIJI UNIVERSITY LIBRARY

第 99 回 明治大学中央図書館ギャラリー展示

「明治大学図書館所蔵 萩藩毛利家の歌書——毛利重就とその時代——」

表紙デザイン： 羽田 真(早稲田大学本庄高等学院教諭)

解題執筆者： 中村 成里(商学部専任准教授)、石澤 一志(鶴見大学非常勤講師)

発 行： 明治大学図書館

発 行 日： 2026 年 9 月 26 日

〈リーフレット訂正〉 4 頁

※第 5 部についての説明は、こちらをご覧ください。

【第 5 部】毛利重就の時代と蔵書

先述のとおり『宝庫御書物目録』は、安永 5 年(1776)頃に編纂され、この時期に宝庫の整理が為されたとみてよいでしょう。重就存命の時期の蔵書には、題簽^{だいせん}に特徴があります。それは金泥で龍紋と呼ばれる文様(『題集』がよい例です)が捺されているものが散見されることです。このブースに展示されている書物には、いずれもこの文様が題簽に見られます。つまり、これらの書物は重就の時代に現在の仕様に整えられたと考えられます。

「35、三光院殿聞書」の「三光院」とは三条西実枝^{さねき}(実澄とも。公条の息男)の法名であり、当該書は実枝の言辞を書きとどめた歌道の聞書です。伝本は略本系(B 系統)となります(大谷俊太氏・豊田恵子氏「校本『三条大納言殿聞書』付略解題」『叙説』31号、2003年)。「36、素然名所百首」の「素然」とは中院通勝の法名です。通勝は後陽成天皇の勅勘を受けたものの、歌人として高い評価を受けていました。奥書には「豊蔀子」の名が記されていますが、この人物は一関藩主田村建頭(1656～1708)です。建頭書写本がさらに書写されて萩藩の書庫に入ったとみられます。「37、詠歌拔出」は、中院通村、通茂の和歌を選び、集成したものです。秀歌撰のような書と云えましょう。「40、溪雲院前内府詠百首和歌」は中院通茂の和歌を収載した書で、霊元天皇の勅点が付されています。

「38、和歌四式」は歌学書で、『歌経標式』『喜撰式』『孫姫式』『石見女式』の四書が収められています。『歌経標式』『喜撰式』『孫姫式』は平安中期以降に成立し、『石見女式』は鎌倉後期頃に成立しています。「39、玄玄集」は能因による私撰集です。当該本は167首が収められている二類本とされています(『新編国歌大観』解題・久保木哲夫氏・平野由紀子氏執筆)。

若き日の松平定信との歌書を介した交流や、三条西家の歌学、中院家の和歌、平安期の歌集や歌学書など、重就の時代に整理された歌書は多岐にわたります。現在の毛利家旧蔵資料の画期は、重就の時代にあったといえるのです。